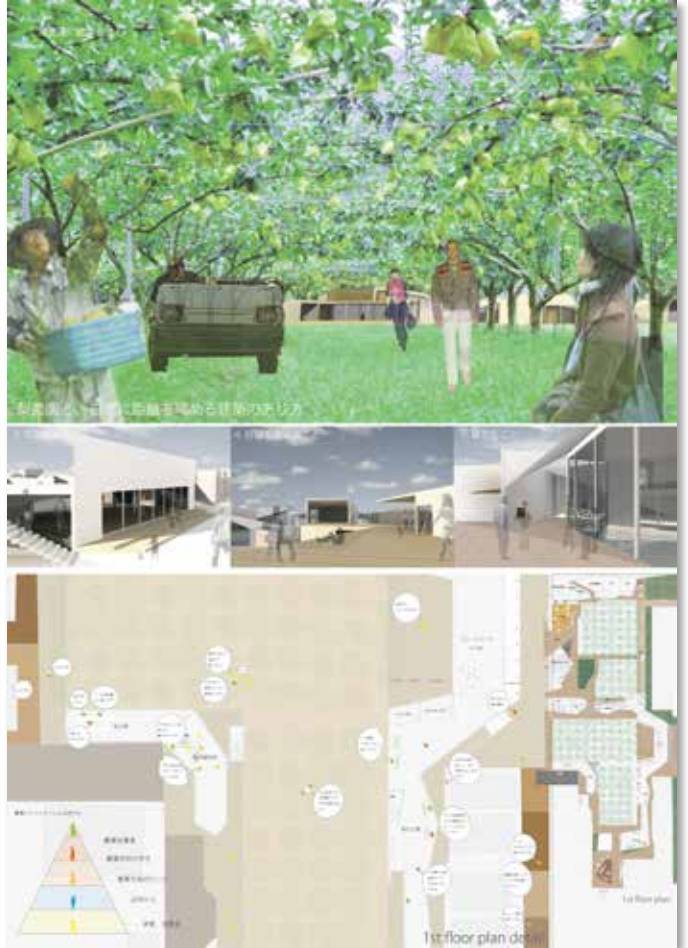


ある街の表象、再び域をする

高井 紀宏 (たかいのりひろ)
東京電機大学 未来科学部 建築学科



都心25km圏内に位置する千葉県鎌ヶ谷市は、梨農園の原風景が表象空間と言える。

しかし、駅周辺に位置する梨農園は、住宅と農地が分断され、街に対して閉鎖的な環境である。

このように、周辺環境の変化に受け入れられない表象空間は消え行くことが予想される。

本計画は、鎌ヶ谷市の梨農園に再度目を向け、人々の暮らしと近い距離に農業があるライフスタイルを提案し、改めて郊外都市に存在する農業の価値を見いだす建築を創造する。

コンセプトは「境界をつくり、境界をなくす建築」である。

住宅と農地の境界部に緩衝材となる建築をつくり、相互関係を改善しながら人々が集う場所を創造する。

直売所、道の駅、農業技術支援センターの3つの機能で建築を構成し、改めて梨農園の風景をフィーチャーし、人々が自らの興味で活動を行う活気ある風景をつくる。

そして、街の表象は再び域をする。

講評

この街は再び「息」を吹き返すことができるのだろうか。そして新たな「域」を獲得できるのだろうか。ウィットに富んだ作者の「意気」がかかる提案は、実に興味深いチャレンジであり、そのさわやかなドロイングと小気味良い応答に、多くの共感を得た。さらに不思議な親近感を抱いたのは、私自身、梨園と隣接する自邸、鎌ヶ谷市に住んでいるというだけではない。建築などによる「物理的な境界」をつくり、人々が一般的に農業に抱いている誤解や馴染みにくさの「精神的な境界」をなくすことを試みた意欲的な提案だからである。

住と農の境界を曖昧にして、その境界部分に「緩衝帯としての多様な空間」を提案し、コミュニティを溶け込ませている手法は見事である。

この案を進化させるためには、人体寸法に裏づけられた微細なスケール感の表出に迫る必要がある。例えば、梨の木は葡萄の木に似て、大人が背伸びすれば、木の上の樹海が広がり、かがむと、木漏れ日を浴びる木の葉に抱かれる。「立てば樹上、座れば樹下、樹海で繰り広げられる人々の交流の物語を綴りたい」。

このような繊細なランドスケープに、もっと呼応する柔らかな印象のデザインを施すとさらに魅力的な提案になっていくだろう。

(審査委員：鳴海 雅人)